科目別シラバス

科目名	１．介護の職務の理解	テキスト	序章：テキスト１・序章　介護の職務の理解
科目概要	§１「介護」とは　§２介護サービスの仕事とは　§３介護の資格とキャリアシステム		
主な到達点	研修に先立ち、これからの介護が目指すべき、その人の生活を支える「在宅におけるケア」等の実践について、介護職がどのような環境で、どのような形で、どのように仕事を行うのか、具体的イメージをもって実感し、以後の研修に実践的に取り組めるようになる。		
通信学習の留意事項			
指導する際の留意事項	・研修課程全体の構成と各研修科目（10 科目）相互の関連性の全体像をあらかじめイメージできるようにし、学習内容を体系的に整理して知識を効率・効果的に学習できるような素地の形成を促す。 ・視聴覚教材等を工夫するとともに、必要に応じて見学を組み合わせるなど、介護職が働く現場や仕事の内容を、できる限り具体的に理解させる。		

時間割

セクション	見出し	時間数
§１「介護」とは	１．法律用語から見た「介護」	30 分
	2. 介護保険制度で提供される介護サービス	１時間
§２　介護サービスの仕事とは	1. 働く側から見た「介護の仕事」	2 時間 30 分)
	2. 利用者の立場からみた介護サービスの状況―介護サービスを利用し在宅生活を継続する高齢者夫婦	1 時間 30 分
§３　介護の資格とキャリアシステム		30 分
合計		6 時間

科目名	2. 介護における尊厳の保持・自立支援	テキスト	第１章：テキスト１・第１章　介護における尊厳の保持・自立支援
科目概要	第1節　人権と尊厳を支える介護 §１人権と尊厳の保持　§２QOL(Quality of Life)の考え方　§３ノーマライゼーション　§４虐待防止・身体拘束禁止　§５個人の権利を守る制度の概要 第2節　自立に向けた介護 §１自立支援　§２介護予防		
主な到達点	介護職が、利用者の尊厳のある暮らしを支える専門職であることを自覚し、自立支援、介護予防という介護・福祉サービスを提供するにあたっての基本的視点及びやってはいけない行動等を理解している。		
通信学習の留意事項	講義を通信の方法で行う場合には、添削及び面接指導により実施するものとする。		
指導する際の留意事項	＜指導の視点＞ ・具体的な事例を複数示し、利用者およびその家族の要望にそのまま応えることと、自立支援・介護予防という考え方に基づいたケアを行うことの違い、自立という概念に対する気づきを促す。 ・具体的な事例を複数提示し、利用者の残存機能を効果的に活用しながら自立支援や重度化の防止・遅延化(ちえんか)に資(し)するケアへの理解を促す。 ・利用者の尊厳を著しく傷つける言動とその理由について考えさせ、尊厳という概念に対する気づきを促す。 ・虐待(ぎゃくたい)を受けている高齢者への対応方法についての指導を行い、高齢者虐待に対する理解を促す。		

時間割

セクション	見出し	時間数
第１節　人権と尊厳を支える介護		
§１　人権と尊厳の保持	1. 人権の考え方	15 分
	2. 人権尊重に関する国連での取り組み	
	3. わが国における基本的人権の保障	
	4. 医療福祉分野での人権	
§２　QOL(Quality of	1. QOL が求められた社会的背景	

Life)の考え方	2. 健康関連 QOL （Health-related QOL:HRQL）	10 分
	3. ADL（日常生活動作）から QOL（生活・人生の質へ）	
	4. 高齢期の QOL と介護	
	5. QOL の意義とこれからの課題	
§３　ノーマライゼーション	1. ノーマライゼーションとは	10 分
	2. ノーマライゼーションの理念の誕生	
	3. ノーマライゼーションの国際的展開	
	4. ノーマライゼーションの難しさ	
	5. ノーマライゼーションの発展 ―「憐れみ」から「人権」へ	
	6. ノーマライゼーションと介護	
	7. ノーマライゼーションに関連する概念	
§４　　虐待防止・身体拘束禁止		10 分
§５　個人の権利を守る制度の概要	1. 高齢者の人権全般を守るための制度	15 分
	2. 判断能力の低下した高齢者の権利を守るための制度	
	3. 悪徳商法などから高齢者の財産を守る制度	
	3. 貧困による生活苦から高齢者を守る制度	
第２節　自立に向けた介護		
§１　自立支援	1. 自立支援とは― 日々の生活に誇りや自信をもてること	15 分
	2.「お世話」の介護観からの脱却	
	3. 残存能力の活用―「からだ」と「こころ」は切り離せない	

	4. 本人の自己選択・自己決定を促し、尊重する	
	5. 心の自立― 生きる希望や意欲を引き出す支援	
	6. 一人ひとりを個別的に理解し、支援していく	
§２　介護予防	1. 高齢者の多数派は 重度の要介護状態ではない	15 分
	2. 介護予防の視点――利用者自身の生活能力や意欲を引き出していく	
	3. 寝たきりは寝かせきりからつくられる	
	4. 介護予防施策の推進	
	5. 二次予防事業――運動器の機能の向上、栄養改善、口腔機能の向上など	
	6. 地域全体で取り組む必要性	
合計		1.5 時間

科目名	３．介護の基本	テキスト	第２章：テキスト１・第２章　介護の基本
科目概要	第1節　介護職の役割、専門性と多職種との連携 §１介護環境の特徴の理解　§２介護の専門性　§３介護に関わる職種 第2節　介護従事者の倫理 §１職業倫理 第3節　介護職における安全の確保とリスクマネジメント §１介護労働における安全の確保　§２事故予防　§３安全対策　§４感染対策 第4節　介護職員の安全衛生 §１介護職員のこころの健康管理　§２介護職員のからだの健康管理		
主な到達点	・介護職に求められる専門性と職業倫理の必要性に気づき、職務におけるリスクとその対応策のうち、重要なものを理解している。 ・介護を必要としている人の個別性を理解し、その人の生活を支えるという視点から支援を捉える事が出来る。		

	評価の基準 ・介護の目指す基本的なものは何かを概説でき、家族による介護と専門職による介護の違い、介護の専門性について列挙できる。 ・介護職としての共通の基本的な役割とサービスごとの特性、医療・看護との連携の必要性について列挙できる。 ・介護職位の職業倫理の重要性を理解し、介護職が利用者や家族と関わる際の留意点についてポイントを列挙できる。 ・生活支援の場で出会う典型的な事故や感染、介護における主要なリスクを列挙出来る。 ・介護職におこりやすい健康障害や受けやすいストレス、またそれらに対する健康管理、ストレスマネジメントのあり方、留意点を列挙できる。
通信学習の留意事項	講義を通信の方法で行う場合には、添削及び面接指導により実施するものとする。
指導する際の留意事項	＜指導の視点＞ ・可能な限り具体例を示す等の工夫を行い、介護職に求められる専門性に対する理解を促す。 ・介護におけるリスクに気づき、緊急対応の重要性を理解するとともに、場合によってはそれに一人で対応しようとせず、サービス提供責任者や医療職と連携することが重要であると実感できるよう促す。

時間割

セクション	見出し	時間数
第１節　介護職の役割、専門性と多職種との連携		
§１　介護環境の特徴の理解	1. 利用者生活の拠点	15 分
	2. 少子高齢社会と介護システム	
	3. 利用者を地域で支える	
§２　介護の専門性	1. 介護の理念	15 分
	2. 介護の対象と目的・定義	
	3. 介護実践の原則	
	4.「社会福祉士及び介護福祉士法の改正」	
	5. 求められる介護福祉士像とは	
	6. 介護職が実施できる医療的ケア	

§３　介護に関わる職種	1. 多職種連携の意義と目的	15 分
第２節　介護従事者の倫理		
§１　職業倫理	1. 倫理観の必要性	30 分
	2. 倫理綱領とは	
	3. 事例紹介	
第３節　介護職における安全確保とリスクマネジメント		
§１　介護労働における安全の確保	1. リスクマネジメントと危機管理の違い	15 分
	2. リスクマネジメント関連用語と定義（ISO/IEC ガイド 51、1999）	
	3. 介護事故と労働災害	
§２　事故予防	1. 不安全状態と不安全行動	
	2. 事故の予防と危険感受性	
	3. 高齢者の特性	
	4. 作業環境管理、作業管理及び健康管理	
§３　安全対策	1. 安全教育	15 分
	2. 危機予知訓練（KYT）	
	3. リスクアセスメントとリスクマネジメント	
	4. 現場で実施できるリスクアセスメント	
	5. 介護事故が起こってしまったときの対応	
§４　感染対策	1. 感染症の基礎知識	30 分
	2. 介護現場に関わる主な感染症	
	3. 感染症対策に対する基本的態度	
	4. 感染症予防の基本事項	
	5. 介護職員の健康管理	
	6. 空調などの設備の管理	
	7. 感染予防に基づいた介助	
第４節　介護職員の安全衛生		

	(1) 安全衛生教育	30 分
	(2) 感染症の予防対策	
	(3) 腰痛予防対策	
	(4) ストレスマネジメント	
	(5) 安全衛生保護具	
	(6) 介護業務	
§１　介護職員のこころの健康管理	1. ストレッサーとストレス反応	
	2. 職場のストレスモデル	
	3. 労働者の心の健康の保持増進のための指針	
	4. 介護職員のこころの健康の保持増進	
§２介護職員のからだの健康管理	1. 腰痛とは	15 分
	2. 職場における腰痛予防対策の基本的な考え方	
	3. 腰痛予防のための労働衛生管理	
合計		3 時間

<table>
<tr><td>科目名</td><td>４．介護・福祉サービスの理解と医療の連携</td><td>テキスト</td><td>第３章：テキスト１・第３章　介護・福祉サービスの理解と医療との連携</td></tr>
<tr><td>科目概要</td><td colspan="3">第１節　介護保険制度
§１介護保険制度創設の背景と目的　§２介護保険制度の動向
§３介護保険制度のしくみ①―保険システム、要介護認定、ケアマネジメント　§４介護保険制度のしくみ②―介護報酬、財源、組織、その他
§５介護サービスの分類と種類　§６主な介護サービスの内容とサービス事業者・施設　§７保険給付以外の事業
第２節　介護と医療の連携
§１介護における医療と福祉の連携　§２介護職と医行為　§３リハビリテーション
第３節　障害者自立支援制度
§１障害者自立支援制度の背景　§２障害者自立支援制度の基本的な構造　§３障害者自立支援制度のしくみと運営の現状
第４節　個人の権利を守るその他の制度
§１生活保護制度　§２成年後見制度　§３日常生活自立支援制度
§４虐待防止制度　§５その他の制度</td></tr>
<tr><td>主な到達点</td><td colspan="3">介護保険制度や障害者自立支援制度を担う一員として最低限知っておくべき制度の目的、サービス利用の流れ、各専門職の役割・責務について、その概要のポイントを列挙できる。

評価の基準
・生活全体の支援の中で介護保険制度の位置づけを理解し、各サービスや地域支援の役割について列挙できる。
・介護保険制度や障害者自立支援制度の理念、介護保険制度の財源構成と保険料負担の大枠について列挙できる。
例：税が財源の半分であること、利用者負担割合
・ケアマネジメントの意義について概説でき、代表的なサービスの種類と内容、利用の流れについて列挙できる。
・高齢障害者の生活を支えるための基本的な考えを理解し、代表的な障害者福祉サービス、権利擁護や成年後見の制度の目的、内容について列挙できる。
・医行為の考え方、一定の要件のもとに介護福祉士等が行う医行為などについて列挙できる。</td></tr>
</table>

通信学習の留意事項	講義を通信の方法で行う場合には、添削及び面接指導により実施するものとする。
指導上の注意	・介護保険制度・傷害者自立支援制度を担う一員として、介護保険制度の理念に対する理解を徹底する。 ・利用者の生活を中心に考えるという視点を共有し、その生活を支援するための介護保険制度、障害者自立支援制度、その他制度のサービスの位置づけや、代表的サービスの理解を促す。

時間割

セクション	見出し	時間数
第１節　介護保険制度		
§１　介護保険制度創設の背景と目的	1. 制度創設の背景	10 分
	2. 制度創設の目的	
§２　介護保険制度の動向	1. 介護保険制度の対象者(被保険者)、要介護認定者数などの増加	
	2. 介護費用の増、介護保険料の増	
	3. 今後の動向と見通し	
	4. これまでの制度改正などの流れ	
	5. 2012(平成 24)年改正の概要	
§３　介護保険制度のしくみ① ―保険システム、要介護認定、ケアマネジメント	1. 制度全体のしくみ	10 分
	2. 保険システム	
	3. 要介護認定	
	3. ケアマネジメント、ケアプランケアマネジャー	
§４　介護保険制度のしくみ② ―介護報酬、財源、組織、その他	1. 介護報酬	
	2. 介護財源	
	3. 制度運営にかかる行政組織など	
	4. 介護保険事業計画	
	5. その他	
	6. 制度全体図	
§５　介護サービスの分類と種類	1. サービス利用者による介護サービスの分類	
	2. 給付（サービスの費用）の種類	

	による分類	10 分
	3. サービスの提供場所による分類	
	4. 介護サービスの種類	
§６　主な介護サービスの内容とサービス事業者・施設	1. 要介護を対象としたサービス（介護給付対象）	
	2. 要支援者を対象としてサービス（予防給付）	
	3. 介護サービス事業者･施設とその指定	
§７保険給付以外の事業	1. 地域支援事業	
	2. 地域包括支援センター	
	3. 保険福祉事業	
第２節　介護と医療の連携		
§１介護における医療と福祉の連携	1. 保健医療サービスと福祉サービス	10 分
	2. 居宅サービスにおける医療と福祉の連携	
	3. 施設サービスなどにおける医療と福祉の連携	
	4. 医療機関との連携	
	5. サービス提供者の意識	
§２介護職と医行為	1. 介護職の業務	
	2. 医行為とは	
	3. 医行為とそれ以外の行為との境界線	
	4. 介護職員が行える医行為	
§３リハビリテーション	1. リハビリテーションとは	5 分
	2. リハビリテーションの過程	
	3. リハビリテーションスタッフの役割	
	4. QOL(生活の質)の向上	
第３節　障害者自立支援制度		
§１障害者自立支援制度の背景	1. 障害者の生活構造の理解	10 分
	2. 人間生活の「３つの存在」と環境因子、主体性などとの相互関係	

	3．障害者福祉の理念	
§２障害者自立支援制度の基本的な構造	1．法律上の「障害者」の定義	5分
	2．改正障害者基本法における「基本原則」の概要	
	3．社会福祉基礎構造改革、障害者自立支援法(当初の法律)がめざしたもの	
	4．今後の「障がい者制度改革」に向けた動向	
§３障害者自立支援制度のしくみと運営の現状	1．改正障害者自立支援法の目的、市町村の役割	10分
	2．障害福祉サービスの種類と内容	
	3．居宅介護、重度訪問介護など、ホームヘルプ事業の概要	
	4．サービス利用のプロセス	
	5．支給決定のプロセス、「サービス等利用計画」の作成	
	6．給付費の財源、及び利用者負担の見直し	
第４節　個人の権利を守るその他の制度		
§１　生活保護制度	1．生活保護制度の理念	5分
	2．生活保護制度のしくみ	
	3．生活保護の基本原理	
	4．生活保護の基本原則	
	5．保護の種類	
	6．保護施設	
	7．被保護者の権利及び義務	
	8．保護の実施	
§２成年後見制度	1．成年後見制度の制定の経過	10分
	2．成年後見制度の概要	
	3．介護保険と成年後見制度	
§３日常生活自立支援制度	1．制度の概要	
	2．利用の手続き	
	3．費用	
§４虐待防止制度	1．高齢者虐待防止法	

	2. 障害者虐待防止法	5 分
§５その他の制度	1. 年金制度	
	2. 医療保険	
	3. 消費者保護対策及び個人情報の保護対策	
合計		1.5 時間

科目名	５. 介護におけるコミュニケーション	テキスト	テキスト２・第１章　介護におけるコミュニケーション技術
科 目 概 要	＜内　容＞ 1.介護職におけるコミュニケーション （1）介護におけるコミュニケーションの意義、目的、役割 〇相手のコミュニケーション能力に対する理解や配慮、〇傾聴、〇共感の応答 （2）コミュニケーションの技法、道具を用いた言語的コミュニケーション、〇言語的コミュニケーションの特徴、〇非言語コミュニケーションの特徴 （3）利用者・家族とのコミュニケーションの実際 〇利用者の思いを把握する、〇意欲低下の要因を考える、〇利用者の感情に共感する、〇家族の心理的理解、〇家族へのいたわりと励まし、〇信頼関係の形成、〇自分の価値観で家族の意向を判断し非難することがないようにする、〇アセスメントの手法とニーズのデマンドと違い （4）利用者の状況・状態に応じたコミュニケーションの実際 〇視力、聴力の障害に応じたコミュニケーション技術、〇失語症に応じたコミュニケーション技術、〇構音障害に応じたコミュニケーション技術、〇認知症に応じたコミュニケーション技術 2.介護におけるチームのコミュニケーション （1）記録における情報の共有化 〇介護における記録の意義・目的、利用者の状態を踏まえた観察と記録、〇介護に関する記録の種類、〇個別援助計画（訪問・通所・入所・福祉用具貸与等）、〇ヒヤリハット報告書、〇5W1H （2）報告 〇報告の留意点、〇連絡の留意点、〇相談の留意点 （3）コミュニケーションを促す環境 〇会議、〇情報共有の場、〇役割の認識の場（利用者と頻回に接触する介護者に求められる観察眼）、〇ケアカンファレンスの重要性		

主な到達点	＜修了時の評価ポイント＞ ・共感、受容、傾聴的態度、気づきなど、基本的なコミュニケーション上のポイントについて列挙できる。 ・家族が抱きやすい心理や葛藤の存在と介護における相談援助技術の重要性を理解し、介護職としてもつべき視点を列挙できる。 ・言語、視覚、聴覚障害者とのコミュニケーション上の留意点を列挙できる。 ・記録の機能と重要性に気づき、主要なポイントを列挙できる。
通信学習の留意事項	講義を通信の方法で行う場合には、添削及び面接指導により実施するものとする。
指導上の注意事項	高齢者や障害者のコミュニケーション能力は一人ひとり異なることと、その違いを認識してコミュニケーションをとることが専門職に求められていることを認識し、初任者として最低限のとるべき（とるべきでない）行動例を理解する。

時間割

時間割

節・セクション	見出し	時間数
第１節　介護におけるコミュニケーション		
§1　介護におけるコミュニケーションの意義、目的、役割	1.コミュニケーションとは	45 分
	2.二者間のコミュニケーション過程の理解	
	3.介護職におけるコミュニケーションの基本	
§2　コミュニケーションの技法	1.質問の技法	45 分
	2.話を要約する技法	
	3.明確化にする技法	
	4.くり返しの技法	
	5.言い換えの技法	
	6.介護職として求められる相談の技術	
§3　道具を用いたコミュニケーション	1.筆談や会話を補助する機器	
	2.聞くことを助ける機器	
	3.読むことを補助する機器	

§4　利用者・家族とのコミュニケーションの実際	1. 利用者の思いを把握する	15 分
	2. 家族の思いを把握する	
	3. 利用者の思いを家族が理解する支援に向けて	
	4. 利用者と家族の思いが一致する支援に向けて	
§5　利用者の状況・状態に応じたコミュニケーションの実際	1. 聴覚・言語障害者とのコミュニケーション	45 分
	2. 難聴者とのコミュニケーション	
	3. 視覚障害のある人とのコミュニケーション	
	4. 失語症のある人とのコミュニケーション	
	5. 認知症のある人とのコミュニケーション	
	6. 知的障害のある人とのコミュニケーション	
	7. 精神障害のある人とのコミュニケーション	
第 2 節　介護におけるチームのコミュニケーション		
§1　記録による情報の共有化	1. 記録の意義・目的	30 分
	2. 介護に関する記録の種類	
	3. 記録の書き方と留意点	
	4. プライバシーの保護と介護サービスの情報公開	
§2　介護サービスにおける報告、連絡、相談	1. 意義と目的	
	2. 報告、連絡、相談をしていく際の留意点	
§3　コミュニケーションを促す環境（介護サービス現場の会議など）	1. ケアカンファレンス、事例検討	
	2. サービス担当者会議	
合　計		**3 時間**

科目名	６．老化の理解	テキスト	テキスト２・第２章　老化の理解
科目概要	＜内　容＞ 1.老化に伴うこころとからだの変化と日常 （1）老年期の発達と老化に伴う心身の変化の特徴 〇防衛反応（反射）の変化、〇喪失体験		

	（2）老化に伴う心身の機能の変化と日常生活への影響 ○身体的機能の変化と日常生活への影響、○咀嚼(そしゃく)機能の低下、○筋・骨・関節の変化、 ○体温維持機能の変化、○精神的機能の変化と日常生活への影響 2.高齢者と健康 （1）高齢者の疾病と生活上の留意点 ○骨折、○筋力の低下と動き・姿勢の変化、○関節痛 （2）高齢者に多い病気とその日常生活上の留意点 ○循環器障害（脳(のう)梗塞(こうそく)、脳出血、虚(きょ)血性(けつせい)心(しん)疾患(しっかん))、○循環器障害の危険因子と対策、 ○老年期うつ病症状（強い不安感、焦燥(しょうそう)感を背景に、「訴え」の多さが全面に出る、うつ病性仮性認知症）、○誤嚥(ごえん)性(せい)肺炎(はいえん)、 ○病状の小さな変化に気付く視点、○高齢者は感染症にかかりやすい
主な到達点	＜ねらい＞ 加齢(かれい)・老化に伴う変化や疾病(しっぺい)について、生理的な側面から理解することの重要性に気づき、自らが継続的に学習すべき事項を理解している。 ＜修了時の評価ポイント＞ ・加齢・老化に伴う生理的な変化や心身の変化・特徴、社会面、身体面、精神面、知的能力面などの変化に着目した心理的特徴について列挙できる。 例：退職による社会的立場の喪失(そうしつ)感、運動機能の低下による無力感や羞恥(しゅうち)心(しん)、感覚機能の低下によるストレスや疎外(そがい)感、知的機能の低下による意欲の低下等 ・高齢者に多い疾病の種類と、その症状や特徴及び治療・生活上の留意点、及び高齢者の疾病による症状や訴えについて列挙できる。 例：脳(のう)梗塞(こうそく)の場合、突発的に症状が起こり、急速に意識障害、片(へん（かた）)麻痺(まひ)、半側(はんそく)感覚障害等を生じる等
通信学習の留意事項	講義を通信の方法で行う場合には、添削及び面接指導により実施するものとする。

指導上の注意事項	＜指導の視点＞ 　高齢者に多い心身の変化、疾病の症状等について具体例を挙げ、その対応における留意点を説明し、介護において生理的側面の知識を身につけることの必要性への気づきを促す。

時間割

節・セクション	見出し	時間数
第1節　老化に伴うこころとからだの変化と日常		
§1　老化に伴うこころとからだの変化	1. 老化のメカニズム	1時間
	2. 寿命	
	3. 老化の特徴	
	4. 老化によるこころとからだの変化と観察のポイント	
	5. 知的能力の老化と特徴	
§2　老化に伴うこころとからだの変化と日常生活	1. 老化による日常生活への影響	30分
	2. 国民生活基礎調査からみた高齢者の有訴（ゆうそ）者率と通院者率	
	3. 身体的な老化と日常	
第2節　高齢者と健康		
§1　高齢者と健康	1. 老人病と成人病、生活習慣病	15分
	2. 代表的な死因と生活習慣病	
§2　高齢者に多い病気と日常生活上の留意点	1. 老化に伴う疾患	15分
	2. 代表的な生活習慣病	30分
	3. その他の生活習慣病	30分
	4. 老化による疾患と生活習慣病全般についてのおさらい	
合　計		**3時間**

科目名	７．認知症の理解	テキスト	テキスト２・第３章　認知症の理解
科目概要	＜内　容＞ 1.認知症を取り巻く状況 　認知症ケアの理念 　　〇パーソンセンタードケア、〇認知症ケアの視点（できることに着目する） 2.医学的側面から見た認知症の基礎と健康管理 　認知症の概念、認知症の原因疾患とその病態、原因疾患別ケアのポイント、健康管理 　　〇認知症の定義、〇物忘れとの違い、〇せん妄の症状、〇健康管理（脱水・便秘・低栄養・低運動の防止、口腔ケア）、〇治療、〇薬物療法、〇認知症に使用される薬 3.認知症に伴うこころとからだの変化と日常生活 （1）認知症の人の生活障害、心理・行動の特徴 　　〇認知症の中核症状、〇認知症の行動・心理症状（BPSD）、〇不適切なケア、〇生活環境で改善 （2）認知症の利用者への対応 〇本人の気持ちを推察する、〇プライドを傷つけない、〇相手の世界に合わせる、〇失敗しないような状況をつくる、〇すべての援助行為がコミュニケーションであると考えること、〇身体を通したコミュニケーション、〇相手の様子・表情・視線・姿勢などから気持ちを洞察する、〇認知症の進行に合わせたケア 4.家族への支援 　　〇認知症の受容過程での援助、〇介護負担の軽減（レスパイトケア）		
主な到達点	＜ねらい＞ 　介護において認知症を理解することの必要性に気づき、認知症の利用者を介護するときの判断の基準となる原則を理解している。 ＜修了時の評価ポイント＞ ・認知症ケアの理念や利用者中心というケアの考え方について概説(がいせつ)できる。 ・健康な高齢者の「物忘れ」と、認知症による記憶障害の違いについて列挙できる。 ・認知症の中核症状と行動・心理症状（BPSD）等の基本的特性、およびそれに影響する要因を列挙できる。 ・認知症の心理・行動のポイント、認知症の利用者への対応、コミュニケーションのとり方、および介護の原則について列挙できる。また、同様に、若年性認知症の特徴についても列挙できる。		

	・認知症の利用者の健康管理の重要性と留意点、廃(はい)用(よう)症候群(しょうこうぐん)予防について概説できる。 ・認知症の利用者の生活環境の意義やそのあり方について、主要なキーワードを列挙できる。 　例：生活習慣や生活様式の継続、なじみの人間関係やなじみの空間、プライバシーの確保と団らん の場の確保等、地域を含めて生活環境とすること ・認知症の利用者とのコミュニケーション（言語、非言語）の原則、ポイントについて理解でき、具体的な関わり方（良い関わり方、悪い関わり方）を概説できる。 ・家族の気持ちや、家族が受けやすいストレスについて列挙できる。
通信学習の留意事項	講義を通信の方法で行う場合には、添削及び面接指導により実施するものとする。
指導上の注意	＜指導の視点＞ ・認知症の利用者の心理・行動の実際を示す等により、認知症の利用者の心理・行動を実感できるよう工夫し、介護において認知症を理解することの必要性への気づきを促す。 ・複数の具体的なケースを示し、認知症の利用者の介護における原則についての理解を促す。

時間割

節・セクション	見出し	時間数
第１節　認知症を取り巻く状況		
§1　認知症ケアの理念	1.「生活者」としての理解――残された意欲や能力に着目していく	30 分
	2. 認知症の人の世界を理解していく――利用者その人が「生活の主人公」	
	3. 利用者本人の「感情面」や「思い」をみていく	
第２節　医学的側面からみた認知症の基礎と健康管理		
§1　認知症の概念	1. 認知症とは	15 分
	2. 認知症に似た状態	
	3. 認知症の診断	
	4. 認知症の評価スケール	

§2　認知症による障害	1. 記憶障害	30 分
	2. 認知機能の障害	
	3. 認知症の原因となる主な疾患	
	4. 若年性認知症と老年期認知症	
	5. 認知症予防対策	
§3　健康管理	1. 健康管理の重要性	15 分
	2. 健康管理のポイント	
第 3 節　認知症に伴うこころとからだの変化と日常生活		
§1　中核症状		30 分
§2　周辺症状	1. 周辺症状の現れ方	
	2. BPSD の出現要因	
	3. 主な BPSD	
	4. 事例検討	
§3　認知症の利用者への対応	1. 認知症の人とのコミュニケーション	30 分
	2. 基本的なケア	
	3. 認知症の人と向かい合うために	
第 4 節　家族への支援		
§1　家族への支援	1. 家族の介護負担感	30 分
	2.家族介護者へのエンパワーメント	
	3.家族のレスパイト	
合　計		3 時間

科目名	８．障害の理解.	テキスト	テキスト 2・第 4 章　障害の理解
科 目 概 要	＜内　容＞ 1.障害の基礎的理解 （1）障害の概念と ICF ○ICF の分類と医学的分類、○ICF の考え方 （2）障害者福祉の基本理念 ○ノーマライゼーションの概念 2.障害の医学的側面、生活障害、心理・行動の特徴、かかわり支援等の基礎的知識 （1）身体障害 ○視覚障害、○聴覚、平衡機能障害、○音声・言語・咀嚼(そしゃく)機能障		

	害、○肢体不自由、○内部障　　害 （2）知的障害 　○知的障害 （3）精神障害（高次脳機能障害・発達障害を含む） 　○統合失調症・気分（感情）障害・依存症などの精神疾患、○高次脳機能障害、○広汎性発達障害・学習障害・注意欠陥多動性障害などの発達障害 （4）その他の心身の機能障害 3.家族の心理、かかわり支援の理解 　家族への支援 　○障害の理解・障害の受容支援、○介護負担の軽減
主な到達点	＜ねらい＞ 　障害の概念と ICF、障害者福祉の基本的な考え方について理解し、介護における基本的な考え方について理解している。 ＜修了時の評価ポイント＞ ・障害の概念と ICF について概説(がいせつ)でき、各障害の内容・特徴及び障害に応じた社会支援の考え方について列挙できる。 ・障害の受容のプロセスと基本的な介護の考え方について列挙できる。
通信学習の留意事項	講義を通信の方法で行う場合には、添削及び面接指導により実施するものとする。
指導上の注意	＜指導の視点＞ ・介護において障害の概念と ICF を理解しておくことの必要性の理解を促す。 ・高齢者の介護との違いを念頭におきながら、それぞれの障害の特性と介護上の留意点に対する理解を促す。

時間割

節・セクション	見出し	時間数
第 1 節　障害の基礎的理解		
§1　障害の概念		30 分
§2　ICF の考え方		
§3　障害者福祉の基本理念		

第 2 節　障害の医学的側面の基礎的知識		
§1　視覚障害		30 分
§2　聴覚・平衡機能障害		
§3　音声・言語・咀嚼機能障害		
§4　肢体不自由		
§5　内部障害		
§6　障害の受容		
§7　知的障害		
§8　精神障害		
§9　高次脳機能障害		
§10　発達障害		
第 3 節　家族の心理の理解		
§1　家族の心理	1.障害児・者の家族の心理	30 分
	2.障害受容	
§2　家族への支援		
合　計		1.5 時間

科目名	9．こころとからだのしくみと生活支援技術	テキスト	テキスト 3　こころとからだのしくみと生活支援技術
科目概要	介護の基本的な考え方（テキスト３・第１章第１節） ＜内　容＞ ○理論に基づく介護（ICF の視点に基づく生活支援、我流介護の排除） ○法的根拠に基づく介護 介護に関するこころのしくみの基礎的理解（テキスト３・第１章第２節） ＜内　容＞ ○学習と記憶の基礎知識、○感情と意欲の基礎知識、○自己概念と生きがい、 ○老化や障害を受け入れる適応行動とその阻害要因 ○こころの持ち方が行動に与える影響、○からだの状態がこころに与える影響 介護に関するからだのしくみの基礎的理解（テキスト３・第１章第３節）		

	＜内　容＞ 　○人体の各部の名称と動きに関する基礎知識、○骨・関節・筋に関する基礎知識、ボディメカニクスの活用、○中枢神経系と体性神経に関する基礎知識、○自律神経と内部器官に関する基礎知識、○こころとからだを一体的に捉える、○利用者の様子の普段との違いに気づく視点 生活と家事（テキスト３・第２章第１節） ＜内　容＞ 生活と家事 　家事と生活の理解、家事援助に関する基礎的知識と生活支援 　○生活歴、○自立支援、○予防的な対応、○主体性・能動性を引き出す 　○多様な生活習慣、○価値観 快適な居住環境整備と介護（テキスト３．第２章第２節） ＜内　容＞ 快適な居住環境整備と介護 　快適な居住環境に関する基礎知識、高齢者・障害者特有の居住環境整備と福祉用具に関する留意点と支援方法 　○家庭内に多い事故、○バリアフリー、○住宅改修、○福祉用具貸与 整容に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護（テキスト３・第３章第１節） ＜内　容＞ 整容に関する基礎知識、整容の支援技術 　○身体状況に合わせた衣服の選択、着脱、○身じたく、○整容行動 　○洗面の意義・効果 移動に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護（テキスト３・第３章第２節） ＜内　容＞ 　移動・移乗に関する基礎知識、さまざまな移動・移乗に関する用具とその活用方法、利用者、介助者にとって負担の少ない移動・移乗を阻害するこころとからだの要因の理解と支援方法、移動と社会参加の留意点と支援 　○利用者と介護者の双方が安全で安楽な方法、○利用者の自然な動きの活用、残存能力の活用・自立支援、○重心・重力の働きの理解、○ボディメカニクスの基本原理、○移乗介助の具体的な方法（車いすへの移乗の具体的な方法、全面介

	助でのベッド・車いす間の移乗、全面介助での車いす・洋式トイレ間の移乗)、○移動介助（車いす・歩行器・つえ等)、○褥瘡予防 食事に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護（テキスト３・第３章第３節） ＜内　容＞ 　食事に関する基礎知識、食事環境の整備・食事に関連した用具・食器の活用方法と食事形態とからだのしくみ、楽しい食事を阻害するこころとからだの要因の理解と支援方法、食事と社会参加の留意点と支援 　○食事をする意味、○食事のケアに対する介護者の意識、○低栄養の弊害、○脱水の弊害、○食事と姿勢、○咀嚼・嚥下(そしゃく・えんげ)のメカニズム、○空腹感、○満腹感、○好み、○食事の環境整備（時間・場所等)、○食事に関した福祉用具の活用と介助方法、○口腔ケアの定義、○誤嚥性(ごえんせい)肺炎の予防 入浴、清潔保持に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護（テキスト３・第３章第４節） ＜内　容＞ 　入浴、清潔保持に関連した基礎知識、さまざまな入浴用具と整容用具の活用方法、楽しい入浴を阻害するこころとからだの要因の理解と支援方法 　○羞恥心(しゅうちしん)や遠慮への配慮、○体調の確認、○全身清拭（身体状況の確認、室内環境の調整、使用物品の準備と使用方法、全身の拭き方、身体の支え方)、○目・鼻腔(びくう)・耳・爪の清潔方法、○陰部清浄（臥床(がしょう)状態での方法)、○足浴・手浴・洗髪 排泄に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護（テキスト３・第３章第５節） ＜内　容＞ 　排泄に関する基礎知識、さまざまな排泄環境整備と排泄用具の活用方法、爽快な排泄を阻害するこころとからだの要因の理解と支援方法 　○排泄とは、○身体面（生理面）での意味、○心理面での意味、○社会的な意味、○プライド・羞恥心、○プライバシーの確保、○おむつは最後の手段／おむつの弊害、○排泄障害が日常生活に及ぼす影響、○排泄ケアを受けることで生じる心理的な負担・尊厳や生きる意欲との関連、○一部介助を要する利用者のトイレ介助の具体的方法、○便秘の予防（水分の摂取量保持、食事内容の工夫／繊維

	質の食物を多く取り入れる、腹部マッサージ） 睡眠に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護（テキスト３・第３章第６節） ＜内　容＞ 　睡眠に関する基礎知識、さまざまな睡眠環境と用具の活用方法、快い睡眠を阻害(そがい)するこころとからだの要因の理解と支援方法、 　〇安眠のための介護の工夫、〇環境の整備（温度や湿度、光、音、よく眠るための寝室）、〇安楽な姿勢・褥瘡予防 死にゆく人のこころとからだのしくみと終末期介護（テキスト３・第４章　ターミナルケア） ＜内　容＞ 　終末期に関する基礎知識とこころとからだのしくみ、生から死への過程、「死」に向き合うこころの理解、苦痛の少ない死への支援 　〇終末期ケアとは、〇高齢者の死に至る過程（高齢者の自然死（老衰）、癌死(がんし)）、〇臨終(りんじゅう)が近づいたときの兆候と介護、〇介護従事者の基本的態度、〇多職種間の情報共有の必要性 介護過程の基礎的理解（テキスト３・第５章１節　専門性を生かした介護過程の展開） 1.介護過程に基づく介護展開（p.399） 講義のポイント ●介護過程の基本的な考え方、流れについて説明してください。 2.介護過程の基本的理解（p.401） 講義のポイント ●介護過程の基本的な視点、姿勢について説明してください。 3.介護過程の必要性――「根拠」や「理由」に基づく介護実践（p.403） 講義のポイント ●介護過程を展開していくうえでの視点について説明してください 4.介護過程の流れ――介護過程を構成しているもの（p.406） 講義のポイント ●介護過程の構成要素について説明してください 総合生活支援技術（テキスト３・第５章第２節　総合生活支援技術演習（事例による展開））

	＜内　容＞ 　生活の各場面での介護について、ある状態像の利用者を想定し、一連の生活支援を提供する流れの理解と技術の習得、利用者の心身の状況にあわせた介護を提供する視点の習得を目指す。 　○事例の提示→こころとからだの力が発揮できない要因の分析→適切な支援技術の検討→支援技術演習→支援技術の課題（１事例 1.5 時間程度で上のサイクルを実施する） 　○事例は高齢（要支援２程度、認知症、片まひ、座位保持不可）から２事例を選択して実施
主な到達点	全体としての＜ねらい＞ ・介護技術の根拠となる人体の構造や機能に関する知識を習得し、安全な介護サービスの提供方法等を理解し、基礎的な一部または全介助等の介護が実施できる。 ・尊厳を保持し、その人の自立および自律を尊重し、持てる力を発揮してもらいながらその人の在宅・地域等での生活を支える介護技術や知識を習得する。 全体としての＜修了時の評価ポイント＞ ・主だった状態像の高齢者の状態像の高齢者の生活の様子をイメージでき、要介護度等に応じた在宅・施設等それぞれの場面における高齢者の生活について列挙できる。 介護の基本的な考え方（テキスト３・第１章第１節） ＜修了時の評価ポイント＞ ・要介護度や健康状態の変化に沿った基本的な介護技術の原則（方法、留意点、その根拠等）について概説でき、生活の中の介護予防、および介護予防プログラムによる機能低下の予防の考え方や方法を列挙できる。 介護に関するこころのしくみの基礎的理解（テキスト３・第１章第２節） ＜修了時の評価ポイント＞ ・人の記憶の構造や意欲等を支援と結びつけて概説できる。 介護に関するからだのしくみの基礎的理解（テキスト３・第１章第３節） ＜終了時の評価ポイント＞ ・人体の構造や機能が列挙でき、なぜ行動が起こるのかを概説できる 生活と家事（テキスト３・第２章第１節）

	＜修了時の評価ポイント＞ ・家事援助の機能と基本原則について列挙できる 快適な居住環境整備と介護（テキスト３．第２章第２節） ＜修了時の評価ポイント＞ ・家事援助の機能と基本原則について列挙できる 整容に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護（テキスト３・第３章第１節） ＜修了時の評価ポイント＞ ・装うことや整容の意義について概説でき、指示や根拠に基づいて部分的な介護を行うことができる 移動に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護（テキスト３・第３章第２節） ＜修了時の評価ポイント＞ ・体位変換と移動・移乗の意味と関連する用具・機器やさまざまな車いす、杖などの基本的使用方法を概説でき、体位変換と移動・移乗に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行うことができる。 食事に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護（テキスト３・第３章第３節） ＜修了時の評価ポイント＞ ・食事の意味と食事を取り巻く環境整備の方法が列挙でき、食事に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行うことができる。 入浴、清潔保持に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護（テキスト３・第３章第４節） ＜修了時の評価ポイント＞ ・入浴や清潔の意味と入浴を取り巻く環境整備や入浴に関連した用具を列挙でき、入浴に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行うことができる。 排泄に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護（テキスト３・第３章第５節） ＜修了時の評価ポイント＞

	・排泄の意味と排泄を取り巻く環境整備や関連した用具を列挙でき、排泄に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行うことができる。 睡眠に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護（テキスト３・第３章第６節） ＜修了時の評価ポイント＞ ・睡眠の意味と睡眠を取り巻く環境整備や関連した用具を列挙でき、睡眠に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行うことができる。 死にゆく人のこころとからだのしくみと終末期介護（テキスト３・第４章　ターミナルケア） ＜修了時の評価ポイント＞ ・ターミナルケアの考え方、対応のしかた・留意点、本人・家族への説明と了解、介護職の役割や他の職種との連携（ボランティアを含む）について、列挙できる。 介護過程の基礎的理解（テキスト３・第５章１節　専門性を生かした介護過程の展開） 介護過程の基本的な考え方、流れについて説明する。 ・ケアプランの「総合的な援助の方針」をふまえ、具体的で細かな日常生活動作や生活行為に関する介護計画を立案する。 ①アセスメント：介護職として必要な情報を整理、確認し、生活課題を明確化する。 ②計画の立案：目標設定、支援内容、方法を決定する。 ③実施：目標、支援内容、方法を関係する介護職員全員で共有して進める。 ④評価：目標に応じた終了時に、支援内容等についてモニタリングし、次の介護計画に生かしていく。 総合生活支援技術（テキスト３・第５章第２節　総合生活支援技術演習（事例による展開）） ①事例紹介から、利用者の置かれている環境、現在の状況や気持ち、家族の思いなど全体像をとらえる。 ②想定される介護サービスにおけるポイントを参考に、演習１に進む。 ③事例ごとに３場面を設定しており、日常生活における移動、食事、排泄、入浴、着替えや外出の身仕度、睡眠、家事などの場面において「自立支援」「安全と安心」「尊厳の保持」の観点と介助の留意点をふまえて、適切な介護方法を考える。 ④さらに支援すべき課題を導き出し、根拠に基づいた介護方法を考える。

	⑤演習後に、難しかったところをまとめ、各種生活支援技術における課題を整理する。 ⑥各事例のまとめを行う。 ⑦演習 2 として、アセスメントの意義や視点を確認するために、それぞれの事例における生活行為や生活動作の確認すべき点、留意点を整理する。 ⑧事例における全体像を振り返り、今後の課題などを推測する
通信学習の留意事項	講義を通信の方法で行う場合には、添削及び面接指導により実施するものとする。
指導上の注意	介護の基本的な考え方 ＜指導の視点＞ ・サービスの提供例の紹介等を活用し、利用者にとっての生活充足を提供しかつ不満足を感じさせない技術が必要となることへの理解を促す。 介護に関するこころのしくみの基礎的理解 ＜指導の視点＞ ・介護実践に必要なこころとからだのしくみの基礎的な知識を介護の流れを示しながら、視聴覚教材や模型を使って理解させ、具体的な身体の各部の名称や機能等が列挙できるように促す 介護に関するからだのしくみの基礎的理解 ＜指導の視点＞ ・介護実践に必要なこころとからだのしくみの基礎的な知識を介護の流れを示しながら、視聴覚教材や模型を使って理解させ、具体的な身体の各部の名称や機能等が列挙できるように促す 生活支援と住環境 ＜指導の視点＞ ・たとえば「食事の介護技術」は「食事という生活の支援」と捉え、その生活を支える技術の根拠を身近に理解できるように促す。さらに、その利用者が満足する食事が提供したいと思う意欲を引き出す。他の生活場面でも同様とする こころとからだのしくみと自立に向けた介護 ＜指導の視点＞ ・たとえば「食事の介護技術」は「食事という生活の支援」と捉え、その生活を

	支える技術の根拠を身近に理解できるように促す。さらに、その利用者が満足する食事が提供したいと思う意欲を引き出す。他の生活場面でも同様とする ターミナルケア ＜指導の視点＞ ・「死」に向かう生の充実と尊厳ある死について考えることができるように、身近な素材からの気づきを促す。 総合生活支援技術演習（事例による展開 ①事例紹介から、利用者の置かれている環境、現在の状況や気持ち、家族の思いなど全体像をとらえる。 ②想定される介護サービスにおけるポイントを参考に、演習 1 に進む。 ③事例ごとに 3 場面を設定しており、日常生活における移動、食事、排泄、入浴、着替えや外出の身仕度、睡眠、家事などの場面において「自立支援」「安全と安心」「尊厳の保持」の観点と介助の留意点をふまえて、適切な介護方法を考える。 ④さらに支援すべき課題を導き出し、根拠に基づいた介護方法を考える。 ⑤演習後に、難しかったところをまとめ、各種生活支援技術における課題を整理する。 ⑥各事例のまとめを行う。 ⑦演習 2 として、アセスメントの意義や視点を確認するために、それぞれの事例における生活行為や生活動作の確認すべき点、留意点を整理する。 ⑧事例における全体像を振り返り、今後の課題などを推測する。 ※第 3 章の内容においては、第 5 章第 2 節「総合生活支援技術演習」で選択する高齢の 2 事例と同じ事例を共通して用い、その支援技術を適用する考え方の理解と技術の習得を促すことが望ましい。 ※第 3 章の内容における各技術の演習及び第 5 章第 2 節「総合生活支援技術演習」においては、一連の演習を通して受講者の技術度合いの評価（介護技術を適用する各手順のチェックリスト形式による確認等）を行うことが望ましい。

時間割

節・セクション	見出し	時間数
（テキスト３・第１章こころとからだの基礎知識）		
第１節　介護の基本的な考え方		

§１　理論と法的根拠に基づく介護	1.介護に関する専門的知識・技術の必要性	3時間
	2.介護サービスは何を目的に支援していくのか	
	3.介護に関わる法律上の規定や考え方	
	4.生活支援としての介護サービス	
	5.医療サービスと介護サービスに求められる役割の違い	
	6.利用者主体の介護	
	7.生活障害という視点	
	8.生活の質(QOL)を高める視点の大切さ	
第２節　介護に関するこころのしくみの基礎的理解		
§１　学習と記憶の基礎知識	1.記憶の働き	1時間
	2.記憶のメカニズム	
	3.長期記憶の機能	
	4忘却	
	5.記憶と加齢	
	6.記憶と学習	
§２　感情と意欲の基礎知識	1.感情の定義	0.5時間
	2.感情の反応	
	3.感情の発生	
	4.感情と加齢	
	5.意欲（欲求）と動機づけ	
	6.マズローの欲求階層説	
§３　自己概念と生きがい	1.さまざまな老年期	0.5時間
	2.自己概念	
	3.老年期と生きがい	
	4.老年期の人間関係と幸福感	
§４　老化や障害を受け入れる適応行動とその阻害要因	1.老化過程への適応	1時間
	2.障害への心理的反応	
	3.障害受容と価値の転換	
	4.障害の自己受容と社会受容	
	5.支援に向けて	
第３節　介護に関するからだのしくみの基礎的理解		
§１　人体の各部の名称と動きに関する基礎知識	1.人体の構造と機能	1時間
	2.バイタルサイン（生命徴候）	

§２　骨・関節・筋に関する基礎知識	1.からだの運動	0.5 時間
	2.骨格と関節	
	3.骨格筋（筋肉）の役割、神経との連動	
	4.ボディメカニクス	
§３　中枢神経系と末梢神経系に関する基礎知識	1.神経系のしくみ	0.5 時間
	2.中枢神経系	
	3.末梢神経系	
§４　自律神経と内部器官に関する基礎知識	1.自律神経	0.5 時間
	2.自律神経と人体の内部器官の各機能	
§５　こころとからだを一体的にとらえる	1.高齢者の健康とは	0.5 時間
	2.こころのしくみ	
	3.からだのしくみ	
	4.利用者を一体的にとらえる	
（テキスト３・第２章生活支援と住環境整備）		
第１節　生活と家事		
§１　家事と生活の理解	1.生活支援としての家事サービス	3 時間
	2.高齢者に対する生活支援の意味するところ	
	3.「生活」の再構築という視点	
	4.生活の大切な要素	
	5.残された能力を活用し、生活能力を高める介護の知識・技術	
	6.認知症高齢者への関わり	
	7.日々を充実することで生じてくる意欲	
	8.普通に暮らすということ	
	9.くつろいで過ごすことのできる条件	
§２　家事援助に関する基礎的知識と生活支援	1.家事援助の方法	3 時間
	2.買い物支援のための基礎知識	
	3.調理（食事）支援のための基礎知識	
	4.洗濯・衛生管理支援のための基礎知識	
	5.清掃支援のための基礎知識	
第２節　快適な居住環境整備と介護		
§１　快適な居住環境に関する基礎知識	1.快適な居住環境づくり	１時間
	2.住居の安全と事故防止	
§２　高齢者・障害者特有の居	1.　高齢者・障害者特有の居住環境整備	

住環境整備と福祉用具に関する留意点と支援方法	2. 目的に合わせた住宅改修や福祉用具選択と使用	2 時間
（テキスト３・第３章こころとからだのしくみと自立に向けた介護）		
第１節　整容に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護		
§１　整容に関する基礎知識	1. 身じたくの意義と目的	3 時間
	2. 身じたくの介護の基本	
	3. 衣服の役割	
	4. 衣服を選ぶときの配慮事項	
	5. 身体状況にあわせた衣服の選択	
	6. 衣服の着脱の支援の基本と留意点	
§２　整容の支援技術	1. 整容行動とは	2 時間
	2. 洗面の意義・効果	
	3. 整髪	
	4. 爪の手入れ	
	5. 化粧	
	6. ひげ剃り	
	7. 口腔ケア	
第２節　移動に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護		
§１　移動・移乗に関する基礎知識	1. 移動の意義	2 時間
	2. 廃用症候群（生活不活発病）とは	
	3. 利用者の身体状況に応じた介護技術	
	4. ボディメカニクスを知る	
	5. 安全・安楽な移動・移乗のために	
§２　さまざまな移乗・移動に関する用具とその活用方法	1. 安楽に関する道具・用具の種類	2 時間
	2. 移乗・移動時の補助具	
§３　介護職員にとって負担の少ない移動・移乗の支援方法	1. 安楽な体位の保持のための介助手順	2 時間
	2. 体位変換	
	3. 車いすの介助	
	4. 歩行介助	
§４　移動と社会参加の留意点と支援	1. 社会とのつながり	1 時間
第３節　食事に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護		
§１　食事に関する基礎知識	1. 食事の意義と目的	
	2. 食事に関連したこころとからだのしくみ	

	3.栄養素とその働き（栄養の理解）	3時間
	4.栄養素と食品の関係（食品の成分）	
	5献立の立て方	
	6.食品の保存と食品の安全性	
	7.調理の基本	
§２　食事環境の整備・食事に関連した用具・食器の活用方法と食事形態とからだのしくみ	1.食事環境の整備	1時間
	2.食器・食具の工夫	
	3.食事介助の技法	
§３　楽しい食事を阻害するこころとからだの要因の理解と支援方法	1.高齢者の食事	1時間
	2.疾患と食事	
§４　食事と社会参加の留意点と支援	1.食事と社会参加	1時間
第４節　入浴、清潔保持に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護		
§１　入浴、清潔保持に関する基礎知識	1.入浴・清潔を保つことの意義と目的	1時間
	2.入浴、清潔を保つことに関わるからだのしくみ	
§２　さまざまな入浴用具と整容用具の活用方法	1.入浴補助用具	1時間
§３　さまざまな入浴・清潔を保つための方法	1.入浴	2時間
	2.入浴介助のポイント	
	3.部分浴	
	4.清拭	
	5.整容（ひげ剃り、整髪、鼻・耳掃除、爪切り）	
§４　楽しい入浴を阻害するこころとからだの要因の理解と支援方法	1.こころの機能の低下が入浴・清潔に及ぼす影響	1時間
	2.からだの機能の低下が入浴・清潔に及ぼす影響	
第５節　排泄に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護		
§１　排泄に関する基礎知識	1.排泄とは	2時間
	2.排泄が及ぼす3つの側面	
	3.おむつ着用のマイナス面：排泄障害が日常生活上に及ぼす影響	
	4.おむつは最終手段	

	5. 排泄介護の基本視点は尊厳の保持と自立支援	
§２　さまざまな排泄環境整備と排泄用具の活用方法	1. 排泄環境整備	1 時間
	2. 排泄用具の活用方法	
§３　爽快な排泄を阻害するこころとからだの要因の理解と支援方法	1. 爽快な排泄を阻害するこころの要因	2 時間
	2. 爽快な排泄を阻害するからだの要因	
	3. 爽快な排泄を阻害するからだの要因	
	4. 排泄介護の実際	
第６節　睡眠に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護		
§１　睡眠に関する基礎知識	1. 日常生活の生活パターン	1 時間
	2. 睡眠とは	
	3. 睡眠障害	
	4. 睡眠障害時の介助と援助方法	
	5 入眠儀式	
§２　さまざまな睡眠環境と用具の活用方法	1. 寝室の環境	1 時間
	2. 寝具・就寝時の衣類	
	3. 福祉用具の活用	
§３　快い睡眠を阻害するこころとからだの要因の理解と支援方法	1. 快い睡眠を阻害するこころとからだの要因	1 時間
	2. 就寝時の支援	
（テキスト３・第４章ターミナルケア）		
第１節　死にゆく人のこころとからだのしくみと終末期介護		
§１　終末期に関する基礎知識とこころとからだのしくみ	1. 死生観を育て利用者の死を受け止める	1 時間
	2. 終末期ケアとは	
	3. 高齢者が死にいたるプロセス	
	4. 利用者ニーズに寄り添う看取りの要件	
§２　「死」に向き合うこころの理解	1. 死に向き合う高齢者の心理	1 時間
	2. 看取りにおける介護職員の基本的態度	
§３　苦痛の少ない死への支援	1. 苦痛を和らげる	1 時間
	2. 緩和ケアのための環境づくり	
	3. 多職種間の情報共有の必要性	
	4. 家族の苦痛緩和	
	5 遺族へのグリーフケア（悲嘆への支援）	
	6. 看取りにおける倫理観（望ましい言動と望ましくない言動）	

（テキスト３・第５章生活支援技術演習）		
第１節　専門性を活かした介護過程の展開		
§１　介護過程の展開	1.介護過程に基づく介護展開	5 時間
	2.介護過程の基本的理解	
	3.介護過程の必要性	
	4.介護過程の流れ	
第２節　総合生活支援技術演習（事例による展開）		
§１　【事例１】Y さん、80 歳、女性、要介護４	1.事例概要	1.5 時間
	2.日常生活の状況	
	3.Y さん本人や家族の思い、今後の支援の方向性	
	4.片まひ、失語症がある利用者への介護サービスにおけるポイント	
	5 総合生活支援技術演習	
	6.場面における介護ポイント	
	7.「支援の全体像」を話し合う	
§２　【事例２】O さん、88 歳、女性、要介護２	1.事例概要	1.5 時間
	2.日常生活の状況	
	3.O さん本人の思い、今後の支援の方向性	
	4.認知症のある利用者への介護サービスにおけるポイント	
	5 総合生活支援技術演習	
	6.場面における介護ポイント	
	7.「支援の全体像」を話し合う	
§３　【事例３】A さん、81 歳、女性、要介護１	1.事例概要	1 時間
	2.日常生活の状況	
	3.A さん本人の思い、今後の支援の方向性	
	4.在宅に暮らす中軽度の認知症がある利用者への介護サービスにおけるポイント	
	5 総合生活支援技術演習	
	6.場面における介護ポイント	
	7.「支援の全体像」を話し合う	
§４　【事例４】K さん、88 歳、女性、要介護５	1.事例概要	
	2.日常生活の状況	
	3.K さんの思い、今後の支援の方向性	

	4.寝たきり状態にある利用者への介護サービスにおけるポイント	1時間
	5総合生活支援技術演習	
	6.場面における介護ポイント	
	7.「支援の全体像」を話し合う	

科目名	１０．振り返り	テキスト	テキスト１よりテキスト３まで
科目概要	１．振り返り 〇研修を通して学んだこと〇今後継続して学ぶべきこと〇根拠にも続いた介護についての要点（利用者の状態像に応じた介護と介護過程、身体・心理・社会面を総合的に理解するための知識の重要性、チームアプローチの重要性等） ２．就業への備えと研修終了後における継続的な研修 〇継続して学ぶべきこと〇研修終了後における継続的研修について、具体的にイメージできるように事業所等における実例を紹介		
主な到達点	研修全体を振り替えり、本研修を通じて学んだことについて再認識を行う。就業後も継続して学習・研鑽する姿勢の形成・学習課題の認識		
通信学習の留意事項			
指導する際の留意事項	在宅・施設いずれであっても「利用者の生活の拠点に共に居る」という意識を持って、その状態における模擬演習（身だしなみ、言葉づかい、応対の態度等の礼節を含む。）を行い、業務における基本的態度の視点を持って介護を行えるよう理解を促す。 研修を通じて学んだこと、今後継続して学ぶべきことを演習等で受講者自身に表出・言語化させたうえで、利用者の生活を支援する根拠に基づく介護の要点について講義等で再確認を促す。 終了後継続的に学習することを前提に、介護職が身に着けるべき知識や体系を再掲するなどして、受講者一人一人が今後継続的に何を学習すべきかを理解できるようにする。 最新の知識の付与と、次のステップ（職場環境への早期適応等）へ向けての課題を受講者が認識できるように促す。		

	介護職の仕事内容や働く現場、事業所等における研修の実例について、具体的なイメージを持てるように教材を工夫・活用する。

時間割

振り返り	3 時間
就業への備えと研修修了後における継続的な研修	1 時間
修了試験	1 時間